G－6　小学校5・6年児童の縫い方（並み縫い）技能に関する予備的研究.

○岩手大教育　清水房・大妻女大　大山サカエ・広島大教育　石浜すみ江

目的　小学校5・6年の児童を対象に縫い方（並み縫い）技能を取り上げ、男女別・学年別の差異や、難易の意識・家庭経験との関係等を実験と調査によって明らかにし教材の適否を判断する為の資料を得ようとして行った予備的実験研究である.

方法　実験・調査対象：岩手大学付属小学校5・6学年児童各学年約40名。時期：昭和46年6月～7月。実験は一週おきに5回担当教官の協力を得て実施。調査は1回目と3回目の実験直後アンケート方式による。用布は生天竺（南樣名トワール）長さ40cm巾45cm、針はJISがす針9号。糸はガス小町とし、1回ごとに色を変えその都度回収、時間は1回3分間とし、あ前に5分間のれんしゅう時間を与えた.

結果①2回目と4回目の針目数について学年ごと男女別にそれぞれの平均値間で有意差のみとめられたのは5・6年男児。女児にはみとめられなかった.（有意水準1%）②難易の意識と技能との関係では、1回目むずかしいと答えた者のうち3回目で普通・やさしいという意識に変化した児童は、5年で75%、6年で86%であった。③家庭経験と技能との関係では、よく・時々すると答えた者としたことがないと答えた者との平均値（3回目の針目数を使用）間には、5年だけに有意差が認められた.（有意水準10%）。④知能とぬい方技能との関係間には、切り方技能の時と同様に関連性がないようである。